

“MY TOWN” うおっちんで

# 歩き目デス & 足ラテス

Vol.74

## 榎谷棚田の魅力と 城本家の石垣

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
ヘリテージマネージャー

この棚田に初めて訪れたのはもう16年ほど前になる。今は「榎谷棚田保存会」が誕生してその保全活動が話題となり、かなり知られるようになって来たが、当時はココの情報は全く無く、たまたま偶然の訪問で出くわした眼前の光景だったので、本当に新鮮な驚きがあった。以下はその時の取材記録「城本音松家の椿と石垣」、そのまま紹介してみたい。

見事な石垣である。そして、これまた見事な椿の大きさが7本ほど。しかもそれは石垣の途中から生えている。

ここは長浜町戒川の最も奥になる榎谷地区。標高500メートルほどのところにある集落である。その椿は、家の西面に垣根として植えられたものか、城本家を守るように並んでいる。いつ頃からあるのか、2000年から3000年か定かでない



「音松氏と椿の石垣」平成12年当時

が、次のようなことが伝わっている。現当主音松氏の祖母（故人）が15、6歳の頃、奉公にあがる際、豆柳地区へ行く道すがらこの前を通り、「随分と古い椿があるもんじゃ。」と思ったという。その時点で今から120年位前の話なので、やはり優に200年は超えていようか。一本二本ならともかく、これほど何本も大きな椿が並ぶ光景を私は知らない。しかも、実はこの他にもう4本左側に続いていたのでという。残念ながら道路際に倉庫を建てる時に切ってしまったらしい。あつた頃はさぞや壮観であつたに違いない。

さて、現在目にするこの立派な石垣で

あるが、これはまだ比較的新しいのだから。何でも、目下70歳の音松氏が本人が40代の働き盛り、約25年ほど前に自ら築いた



「いつ頃築かれたのか、落し築きの古風な石垣」

ものだという。元は、竹やぶの斜面だったらしく、また椿も大きくなり過ぎて傾きかけるものもあつたりで、家の高さを超えないよう、その都度枝先を剪定していたようだ。地盤が弱いという点もあつたようで、補強のために石垣を築こうと思ひ立たれたらしい。丁度近くで町の林道を延ばす工事があつて、いい石（青石）が出ていたこともきっかけの後押しとなつた。

だが、そうは言っても、普通の棚田程度の高さの違い、4メートルを超えるほどの石垣である。並大抵でなかったに違いない。集落の人の応援もありはしたが、コツコツと2年にわたって築き上げていったらしい。時間をかけたのには、農繁期を避け、合間仕事ですることの他に、もう一つの理由があつた。この位の高さになると、重量も半端でなくて、沈み込みが見

「音松氏が作るわらぐろが整然と並ぶ」平成12年当時



られるので、地盤が沈下する具合も見定めながら、時間をかける必要があったのである。そうした念の入れ方もあってか、勿論今でもビクともしない堅牢さである。ご本人は「素人築きじゃけん。」と謙遜されるが、いやナカナカ。ただ、例の樁の太木があるのでそれを囲うように築かれ、その点も苦心されたと思われる。今でも、少し木が太ったものか、一部石垣に食い込んでいる箇所を見て「可哀そうなことをした、少し石を割ってやらんといかん。もうちつと余裕をあげといてやった

ら良かったんじゃがの。」と、愛おしむ言葉がふと口をつく。  
また、「ワシらの横積みにして築くだけじゃけん大したことは無いが、昔の人のそれはそら築き方が違うぞ。こっちに見えるけん、まあ見てみなはるか。」と、私を案内する。それは、道路に面した倉庫の中、先ほど触れた、昔椿が生えていた側の元の石垣面である。ナルホド、厚み60cm長さ2mほどもある大石が無造作に斜めに築かれている。落とし築きとも呼ばよいか、一見乱暴にも見えるその石



「実りの秋を迎えた榎谷棚田、257枚（大洲農高調べ）あるらしい」

積みは、ラフではあるが、逆に盤石のゆるぎなさを感じさせる。不規則ながらも大小の取り合わせが絶妙のパランスで組み立てられている。機械や道路の無い時代のことなのに、流石の音松氏も敵わない。あれだけの石垣を築きながらなお「大したこと無い。」と謙虚さを口にする手本がコレなのである。ウーン確かに。こんな山奥と言っては失礼だが、いや当時も大した人が住んでいたということだ。

目を西に転じると、西日が幾重にも重なる棚田を照射し、ポチポチ夕景に差しかかろうかという頃合い。今ではもうあまり見られなくなったわらぐろも10数基が並んでいる。これも音松氏の作だという。そのわらぐろの陰にはまだ2日前の残雪があり、その空気の冷たさが、この村の風景の美しさを際立たせてもいた。石垣、椿、棚田、わらぐろ、そして夕景、私はまるで桃源郷にでも迷い込んだような心持で、寒さも忘れ、しばしその場に佇んでいた。

（平成12年  
1月28日）



「榎谷へ向かう途中の、見事なトウキビ干し」